

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年8月12日(水)

《忠告は祈りの中で識別し、中正と公平を持つべきもの》

おはようございます。

暫く、聖書についてお話ししましょう。イエス様は異邦人に対してどのような心を表されたのでしょうか。不快感を見せていたのですか？ そうじゃなかったのですね。しかし、今日の福音(マタイ 18・15-20)の真ん中のところに『その人を異邦人が徴税人と同様に見なさない。』というところがあります。このような言い方はまるで、イエス様が異邦人に対して罪人のように思われたように見えます。

これについて、聖書学者達は、イエス様が直接おっしゃった話ではなくて、イエス様がいなくなって、彼を主として従う初代キリスト共同体が形成された時、ユダヤ人であったマタイの考え方が反映された箇所だと推測しています。やっぱり人々が大勢集まると問題が起こります。初代教会にもいろいろな問題がありました。民族主義に陥った信者もいたし、異邦人の出身の信者もいました。そして、文化的に言語的に色々葛藤がありました。教えに従わない者も出て来て、離れる人々もありました。それで、ユダヤ人であったマタイ自身の性向によって後から付け加えた箇所だと言っていることです。ですから、聖書を読む時にイエス様がいつも語っている事と違うのではないかと違和感を覚えるとき、また、今回のように『徴税人と同様に見なさない』とはどういう意味かと疑問に思う場合には、「私は聖書を勉強しなければならない」という気持を起してください。

さあ、今日の福音で「忠告」という言葉が出てきました。「忠告しなさい」忠告ってしやすいことでしょうか。そうです。難しいことです。そしたら、子供のように少し漢字の勉強をしてみましょう。「忠告」の忠はどういう意味でしょうか。二つの意味を持っています。「真ん中に心を置け」という意味と「心の中のこと」という意味です。「真ん中に心を置け」とはどういうことでしょうか。偏らないこと。傾かないこと。つまり「公平」を意味します。どちらにも傾かず、真ん中に心を置くことは「真実」を意味します。「正しさ」を意味します。そしたらも一つの解釈は何でしたか。「心の中にあるもの」これはどういうことですか。大体、私たちは「忠告」と言いながらも実際は自分のために相手を責めるのです。損を受けたから、或いは傷を受けたから、その反応として「あなた、それはいけないよ」と言いながらも、その人のためではなく、結局ほとんど自分のためにするのが私たちの「忠告」ではないでしょうか。

皆様、「忠告」と「警告」はまったく違います。警告は「やらなかったら、やられるよ」と戒め告げることをいいます。「忠告」は心の中にあるものを告げることをいいます。忠のもう一つの意味は忠実ということです。【中正】と【公平】を持たない忠告は、自分を守るためにする話とか、相手を責めるためにする話にすぎないことを意識しましょう。「忠告」とは本当にその人のためにこれが良いのか、良くないのか、言っているのか、言わなくてもいいのか、今が善いのか、後が善いのか、それを何回も何回も祈りの中で識別して口に出さなければならないものです。しかし、あまりにも簡単に私たちは言ってしまう。「忠告」この言葉はものすごく重くて、それでも美しい言葉です。この言葉を実践しようとするためには、自分が先に満たされていなければなりません。

皆様、「忠告」されるのも嫌ですし、するのも嫌ですよ。出来るだけこんなことを言わずに滑らかに事が上手く運ばば一番いいです。しかし、それが出来ない場合があります。その時はよく祈って、

「忠告」の意味を考えながら、弁<sup>わきま</sup>える時間をお持ち下さい。その後、どう考えてもあの人のために必要なことだ、私が言わなかったらその人は崩れてしまう、もっと悪くならないうちに私が言わなければならないと結論が出たら、祈る心で「忠告」して下さい。ものすごく技も必要なことです。家庭の中でもまったく同じです。夫婦でも、親子の関係でも、また友人の関係でも、そんなに気軽に「忠告」出来るものではありません。

とにかく皆様、心を真ん中に置いて誰かに私が「忠告」する時、その心の中にあるものは必ず真実なものではないといけません。そのような気持で私たちは言い出しているのか、言い出そうとしているのか、良く考えましょう。もちろん難しいことですので、このように「忠告」出来る人は少ないと思います。しかし、いつもこのような心で「忠告」を考えてみましょう。

ありがとうございました。